

生誕 400 年

D E G U

C H I

N O B U

Y O S H I

# 出口延佳

—神道は日本の道なり—



『伊勢参宮名所図会』豊宮崎文庫

開館時間 9時～16時半

休館日 4月22日(火)・5月27日(火)

お問合せ 式年遷宮記念せんぐう館

〒516-0042

三重県伊勢市豊川町前野 126-1

TEL 0596-22-6263

<http://www.sengukan.jp/>

期間 平成 26 年

3・27 [木] - 6・23 [月]



平成二十五年度企画展示

生誕四百年

# 出口延佳

— 神道は日本の道なり —

## はじめに

出口延佳は江戸時代前期の豊受大神宮（外宮）の権禰宜です。

延佳は寛永六年（第四十三回）・慶安二年（第四十四回）・寛文九年（第四十五回）・

元禄二年（第四十六回）の四度の式年遷宮に奉仕すると共に、豊宮崎文庫を創設して

古典の研究を推し進め、その成果を刊行して広く世間に神道を啓蒙した人物です。

今年、生誕四百年を迎えるにあたり出口延佳の遺徳を偲びつつ、功績を顕彰して、著述より今日に通じる神道について考える機会となれば幸いです。

平成二十六年三月二十七日

式年遷宮記念せんぐう館

## 目次

ごあいさつ

## 目次

一、出口延佳でぐちのぶよしの生涯

二、出口延佳でぐちのぶよしの説く神道しんとう

三、『鼈頭古事記かめとうこじき』の刊行

四、豊宮崎文庫とよみやざきぶんこの創設

展示資料一覧

主要参考文献

## 凡例

・この図録は平成二十六年三月二十七日から六月二十三日にかけて式年遷宮記念せんぐう館において開催する企画展示「生誕四百年 出口延佳―神道は日本の道なり―」に際して作成したものである。

・図録の資料図版の順は、展示順序を示すものではない。

・展示資料の写真は当館が撮影した。

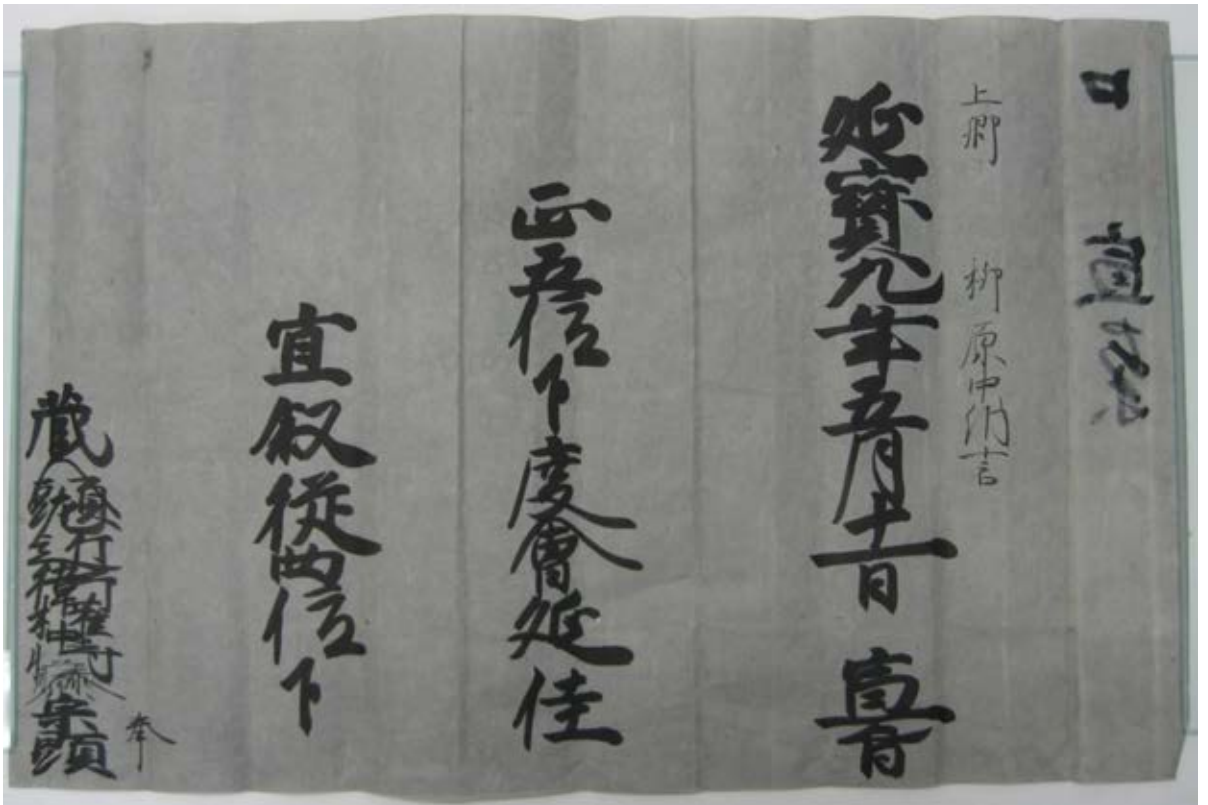
・本書の編集・執筆は芝本行亮があたった。

# 一、出口延佳の生涯

出口延佳は慶長二十年（一六一五）四月二十八日、外宮権禰宜出口延伊の嫡男として生まれました。元和六年（一六二〇）外宮権禰宜に任ぜられ、正四位下まで累進しました。延佳の功績は神明奉仕の傍ら古典の収集と文庫の創設、神道に関する著述と豊受大神宮の撰社田上大水神社を再興したことが挙げられます。

戦国の乱世により古典が散逸したことを嘆いて、これを探し求め豊宮崎文庫を創設。文庫には書物を収める書庫と外宮周辺に住む神主・御師とその子弟が使う教育施設の講堂を備えていました。

著書は『陽復記』『神宮秘伝問答』『太神宮神道或問』などの神道の啓蒙書を著して中世以来の度会神道を再興し、近世の文事興隆にあつては全国の諸本を書写して『先代旧事本紀』『古事記』などの古典を校訂し、注釈書『鼈頭旧事紀』『鼈頭古事記』を刊行する業績を残しています。延佳は元禄三年（一六九〇）正月十六日、七十六歳で卒去しました。



靈元天皇口宣案 出口延佳宛 延宝九年五月十一日付 一通

神宮徴古館

縦三十四・〇cm 横五十三・〇cm

【翻刻】

口宣案

上卿 柳原中納言

延宝九年五月十一日 宣旨

正五位下度会延佳

宜叙従四位下

藏人頭左近衛権中将藤原宗頭奉

【読み下し】

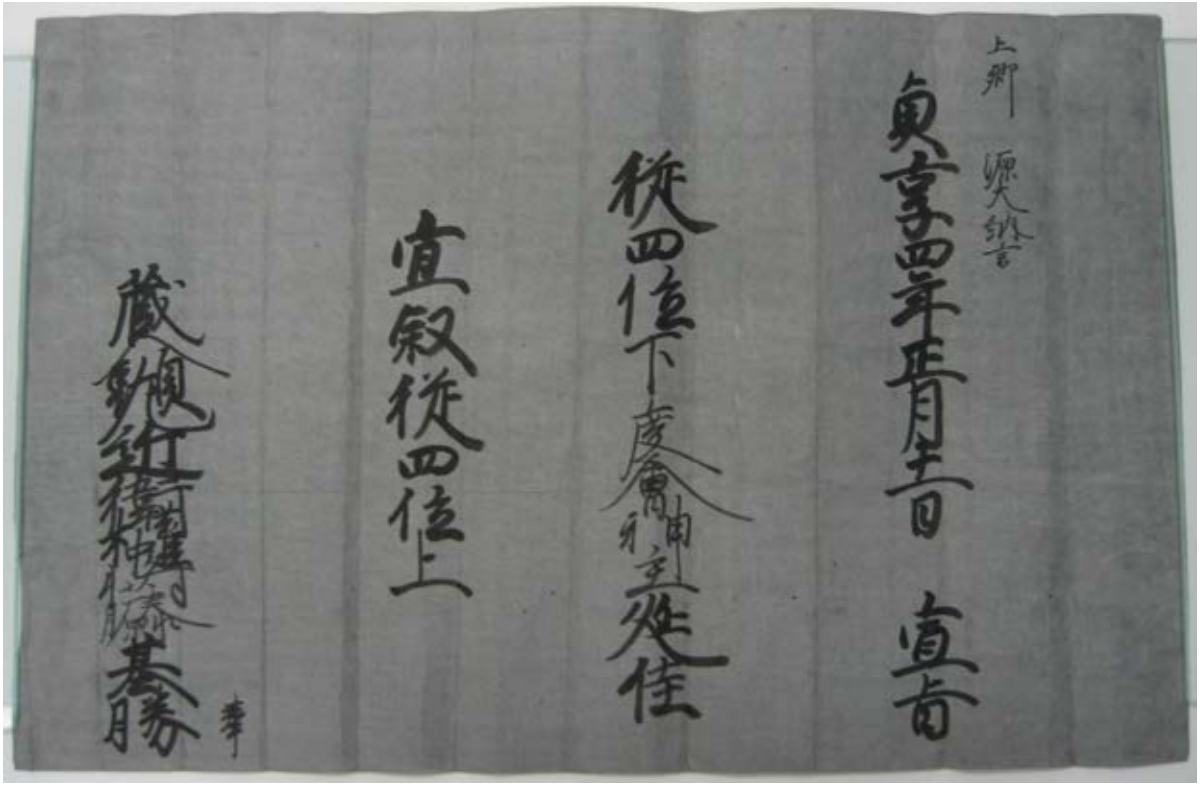
上卿 柳原中納言

延宝九年五月十一日 宣旨す

正五位下度会延佳

宜しく従四位下に叙すべし

藏人頭左近衛権中将藤原宗頭奉る



靈元天皇口宣案 （一六八七） 出口延佳宛 貞享四年正月十一日付 一通

神宮徴古館

縦三十四・〇cm 横五十三・〇cm

【翻刻】

上卿 （久我通誠） 源大納言

貞享四年正月十一日 宣旨

從四位下度會神主延佳

宜叙從四位上

藏人頭左近衛權中將藤原基勝奉 （圖）

【読み下し】

上卿 みなもとのだいなごん 源 みなもと 大納言

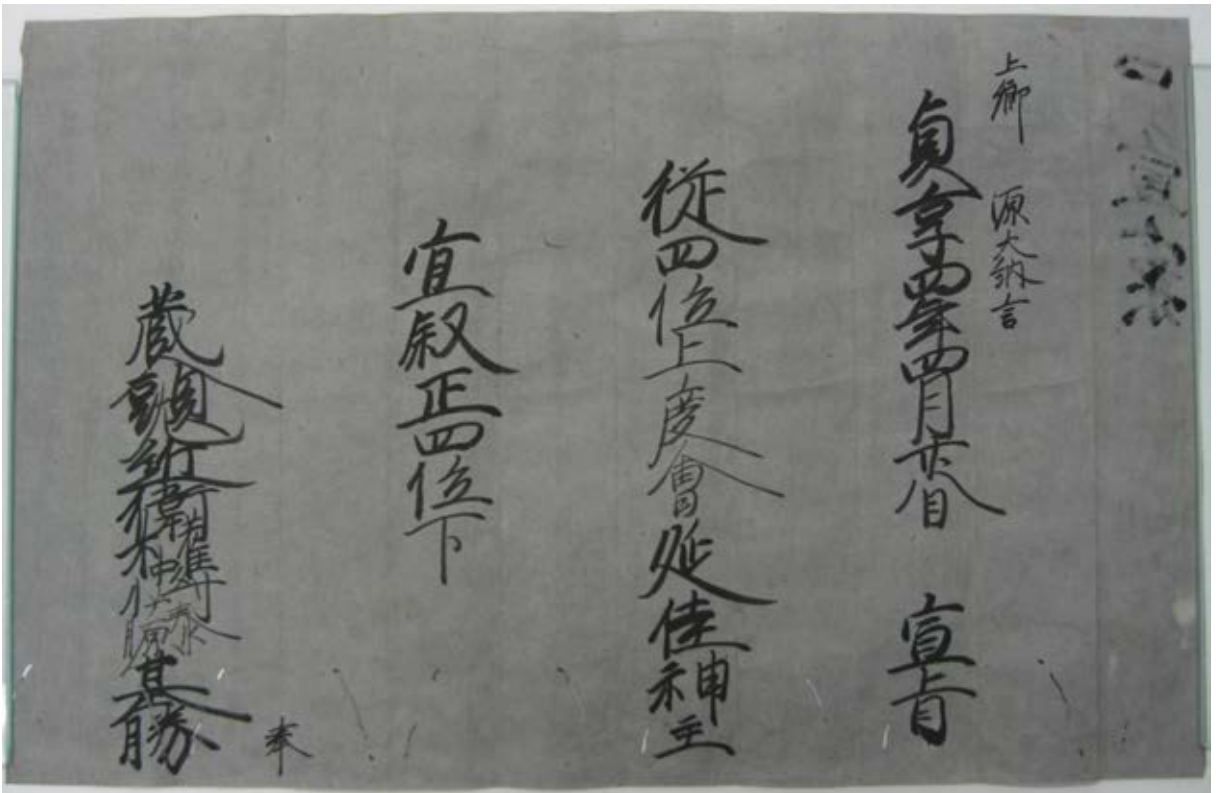
貞享四年正月十一日 宣旨 せんじ

從四位下度會神主延佳 じゆし いのけわたらいかんぬしのぶよし

宜しく從四位上に叙すべし よろしく じゆし いのじよう じよ

藏人頭左近衛權中將藤原基勝奉 くろうどのとうさこのえのごんのちゆうじようふじわらのもとかうけたまわる





靈元天皇口宣案 出口延佳宛 貞享四年四月二十八日付 一通

神宮徴古館

縦三十四・〇cm 横五十三・〇cm

【翻刻】

口宣案

上卿 源大納言

貞享四年四月廿八日 宣旨

從四位上 度會延佳神主

宜叙正四位下

藏人頭左近衛權中將藤原基勝奉

【読み下し】

上卿 源大納言

貞享四年四月二十八日 宣旨す

從四位上 度會延佳神主

宜しく正四位下に叙すべし

藏人頭左近衛權中將藤原基勝奉る

## 二、でぐちのぶよし 出口延佳の説く神道しんとう

出口延佳の著書に見られる神道しんとうについて、まず慶安三年（一六五〇）に著した『陽復記』ようふくきに、「神道と云は、人々日用にちようの間にありて、一事ひとこととして神道しんとうならずと云事いふことなし」と記して、神道は日本人の日常生活にあつて、ことごとくに理屈を立てて指導するまでもなく、日本人の生き方こそが神道であると語っています。また『神道秘伝問答』しんとうひでんもんどう（万治三年・一六六〇）には、「神道ハ日本ノ道也、儒道ハ震旦しんたんノ道也、仏道ハ天竺てんじくノ道也、吾身わがみハ異国ノ人カ本朝ノ人カト身ヲ省かえりみヨ」とあり、『太神宮神道或問』たいじんぐうしんとうわくもん（寛文三年・一六六六）には、「神を祭る法ほうなどは祢宜神主ねぎかんぬしのする事にて、神道と云は上一人かみいちにんより下万民しもばんみんまで行ふ旦暮たんぼの道なり」と書いて、神道しんとうは神社の神主が行う祭典さいてん・儀式作法ぎしきさほうなどの神事しんじの道ではなく、日本に生まれた日本人の日常の教えであり、当然踏み行うべき道。神道は天皇陛下をはじめ日本人が各々の職分しよくぶんを尽くして、日本人としての自覚をもつて日々の生活をしていくことだと説といています。



『陽復記』 二冊

神宮文庫

出口延佳著

(一六五〇) (一六五一) はんこう  
慶安三年誌・慶安四年板行

縦二十七・〇cm 横十六・七cm

『陽復記』は三十六歳の時の著作。神宮の由緒・祭神・式年遷宮を平易な文章で書き記し、日本人の神道と儒教・仏教の関係を説明しています。図版の箇所には、

それ神道と云は、人々日用の間にありて、一事として神

道あらずと云事なし

と記されており、神道は日本人の日常生活にあつて、ことごとくに理屈を立てて指導するまでもなく、日本人なら自得できる日常生活にある道であるので、日本人の生き方こそが神道であると説いています。

(一六五二) 慶安五年八月二十七日、後光明天皇は『陽復記』に関心を示さ

れて、神宮伝奏鷲尾隆量に著者の名を尋ねられる事があり、豊

宮崎文庫の創設と共にその学功を称えて、叙位の伝達が神宮

祭主河辺定長に寄せられました。祭主定長は出口延佳を上洛さ

せ、延佳は神宮伝奏鷲尾隆量より内旨を承りました。



『神道秘伝問答』 二冊

神宮徴古館

出口延佳著

(一六六〇) (一六九八)  
万治三年誌・元禄十一年板行

縦二十六・五cm 横十八・四cm

『神道秘伝問答』は正・続の二編からなり、神宮の由緒・祭神・式年遷宮を平易な文章で書き記し、問答形式で日本人の神道と儒教・仏教の関係を説明しています。

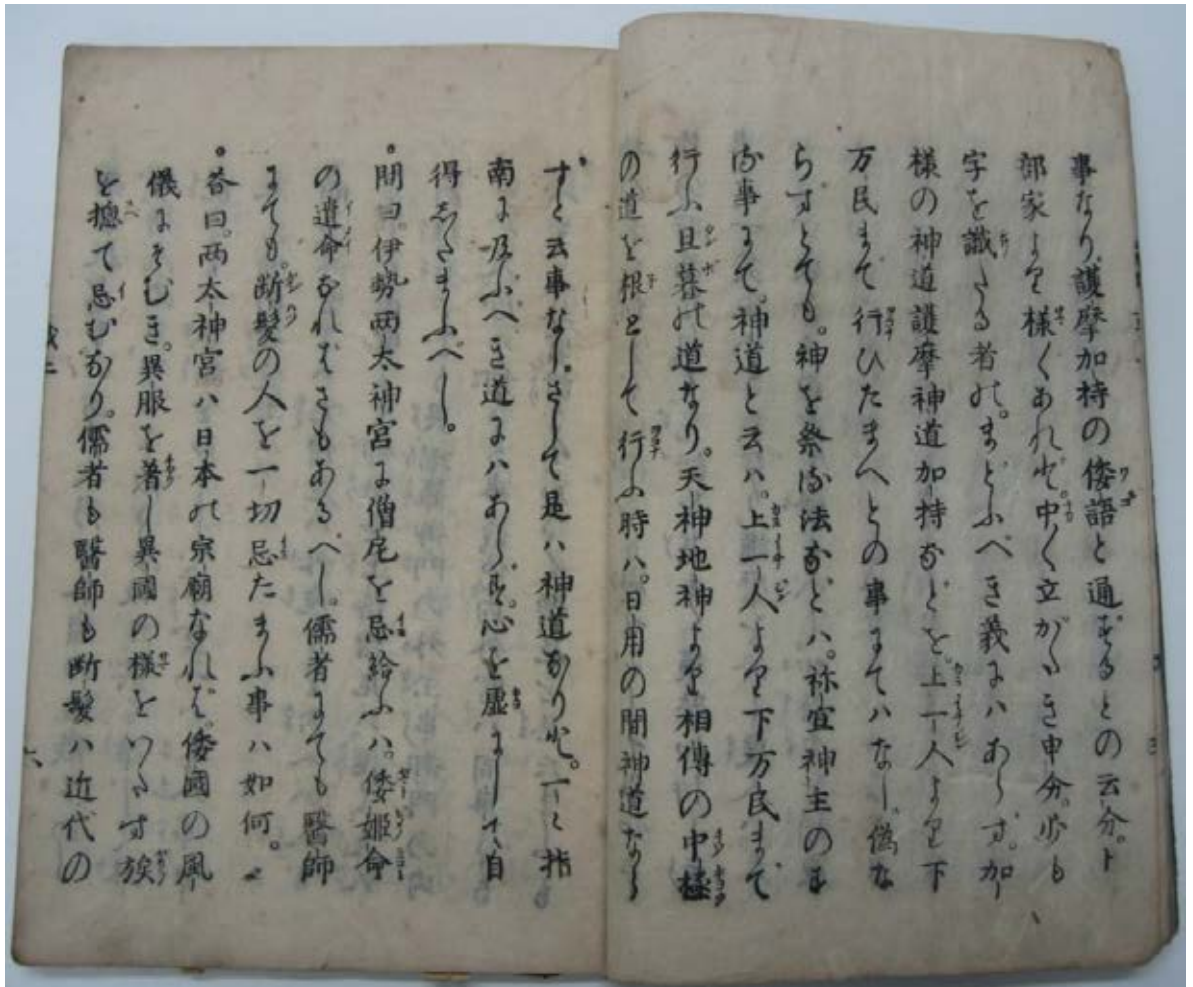
図版の箇所には、

神道ハ日本ノ道也、儒道ハ震旦ノ道也、仏道ハ天竺ノ

道也、吾身ハ異国ノ人カ本朝ノ人カト身ヲ省ヨ

如此了簡ノ上ニテ、本朝ヲ主トシテ異国ノ聖賢ノ書ヲ  
学ハ吾神道ノヨキ羽翼ナルベシ

と書かれています。神道は日本人の生活規範の基であるとし、ま  
ず神道を踏まえて、日本人として自覚することを説き、その上で  
礼儀や徳・修養の為に儒教・仏教を学んで用いるようにと説いて  
います。



『太神宮神道或問』 一冊

神宮徴古館

出口延佳著

寛文六年誌・元禄十二年板行

縦二十五・五cm 横十七・五cm

『太神宮神道或問』は上・下の二巻からなり、神宮の祭神や祭典・式年遷宮・神道について問答形式で書き綴っています。

図版の掲載箇所には、

神を祭る法などは祢宜神主のする事にて、神道と云は

上一人より下万民まで行ふ且暮の道なり

と記しています。神道は神社の神主が行う祭典・儀式作法などの

神事の道ではなく、日本に生まれた日本人の日常にあり、神道は

天皇陛下をはじめ日本人が日本人としての自覚をもって日々の生

活をして、各々の職分を全うすることだと説いています。

### 三、『鼈頭古事記』の刊行

『鼈頭古事記』は貞享四年（一六八七）に刊行された『古事記』全巻の最初の注釈書です。板本の上中下三巻からなり、上巻の見返しに「度会延佳神主校正、鼈頭古事記、勢陽講古堂・洛陽重徳堂蔵版」とあり、下巻の跋文末尾には「貞享四年二月二十九日、豊受皇太神宮権禰宜正四位下度会神主延佳」と記されています。「鼈頭」とは本文の上にある余白の部分に注記した「頭注」を意味します。

出口延佳は寛永二十一年（一六四四）に刊行された寛永板本『古事記』に誤りが多い為、数多くの古写本を用いて校合し、正確な本文を作成しています。更に『万葉集』『日本書紀』『延喜式』などの国書や『玉篇』『説文』『爾雅』などの漢籍を引用し、本文に注釈を施しました。

出口延佳の『鼈頭古事記』刊行から百年後、本居宣長が『古事記伝』を著しますが、出口延佳の『鼈頭古事記』の本文校正を七割がた利用して古代国語による訓読を進めています。出口延佳は『古事記』訓読研究の基礎を築いたといえます。



『鼈頭古事記』 三冊

神宮文庫

出口延佳校正

(一六八七)  
貞享四年(一六八七)板行

縦二十七・五cm 横十八・七cm

『鼈頭古事記』は上・中・下の三巻から成り、出口延佳は『古事記』の古写本と比較して字句の異同を正して本文を示し、『万葉集』『日本書紀』『延喜式』などの国書や『玉篇』『説文』『爾雅』などの漢籍を引用して注釈を施しています。

掲載箇所は『古事記』の上巻の冒頭です。書き出しの「天地初発之時」の六文字は次のように読まれています。

「天地初発之時」

あめつちはじめてひらけしときに (大須宝生院 国宝『古事記』)

あめつちはじめてひらくるとき (出口延佳『鼈頭古事記』)

あめつちはじめのとき (本居宣長『古事記伝』)

あめつちはじめておこりしときに(澤鴻久孝・西宮一民編『古事記』この「天地初発之時」の六文字の中で相違が見られる点は、

「発」を「ひらく」と読んだり、「おこる」と読んだり、または「初発」の二字で「はじめ」と読んだりしています。

それぞれに根拠があるのですが、和銅五年に『古事記』を撰録した太安

萬呂まろの意図した読みにとだけ迫ることができるか、現在も研究が進められています。

## 四、豊宮崎文庫の創建

外宮げくうの東隣に凶書館兼学問所の豊宮崎文庫とよみやざきぶんこがありました。現在は「史蹟 旧豊宮崎文庫」の石碑と跡地を残すのみです。

出口延佳でぐちのぶよしは神宮祭主河辺定長じんぐうさいしゆかわべさだなが・大宮司河辺精長だいくうじかわべきよなが・山田奉行八木宗直やまだぶぎようやぎむねなおの協力を仰ぎ、慶安元年けいあん（一六四八）与村弘正よむらひろまさ・岩出末清いわですえきよ・青山あおやま正清まさきよが中心となって七十名余りの賛同を得て文庫を創設しました。その趣旨しゆしは『伊勢太神宮神異記』いせだいじんぐうしんいきに、

「太神宮だいじんぐうの御為おんため、神書しんしょ・古記こき・和漢わかんの書籍しよじやくを集め、万代ばんだいに残し、且かつは所ところの人にも学問をすすめんためなり」と記しています。

文庫ぶんこには書籍を置く書庫しよこと神宮の神主・御師を含むすべての人々とその子弟しゆがくの修学しゆがくの場として講堂こうどうを併設していました。

文庫は明治元年（一八六八）に宮崎学校みやざきがっこうの開校と共に閉められましたが、文庫の書籍は神宮文庫に収蔵され、跡地おもてもんと表門は大正十

二年（一九二三）三月七日、国の指定文化財くにしていぶんかざい（史跡）となりました。





『伊勢太神宮神異記』 二冊

神宮徴古館

出口延佳著

(一六六六)  
寛文六年板行

縦二十七・〇cm 横十七・五cm

『伊勢太神宮神異記』は出口延佳が内宮・外宮における靈験なる神異・奇異を記した著作。

掲載箇所には、文庫設立の趣旨が記されています。

太神宮の御為、神書・古記・和漢の書籍を

あつめ、万代に残し、且は所の人にも学問を

すすめんためなり

出口延佳は世間への教育普及の為、古典・古記録を書写して集積し、文庫を創設しました。文庫では図書の貸出が行われ、研究者の講義が聴講できる講堂を併設していました。この文庫創設の事は後光明天皇の勸諭に達し、その学功を称えて叙位の伝達が寄せられます。

しかし、延佳は父より位階が上になることから、この賞を父に譲って、<sup>(一六五四)</sup>承応三年四月二十六日、延佳の学功によ

り父延伊が正五位下に叙せられました。



豊宮崎文庫講堂扁額 一面

神宮文庫

林信篤筆

縦八十二・一 cm 横一五四・〇 cm 厚さ七・五 cm

扁額には「豊宮崎文庫 弘文学院林学士書【林氏鳳岡】【直民】【漱芳園】」と刻まれています。林信篤は江戸時代の儒学者で、林鷲鳳の次男。号を鳳岡と称して、將軍徳川家綱・綱吉・家宣・家継・吉宗に仕えました。江戸の湯島に孔子廟と学問所を設けて教育の振興に努めました。元禄五年正月、林信篤は『豊宮崎文庫記』を記して、同文庫に奉納しています。

扁額の裏面には「以正殿御座板之舊材造焉、元禄三年庚午十一月十八日」と墨書があります。元禄二年に外宮正遷宮（第四十六回）が行われ、扁額は寛文九年に建てられた旧御正殿内の「御座板」が使われています。「御座板」は「みましのいた」と訓むのか定まっていますが、御船代を据えていた御座板を使って、元禄三年に扁額が造られました。

扁額が掲げられた講堂では、室鳩巢（儒学）・貝原益軒（本草学）・井澤蟠龍（国学）・伊藤東涯（儒学）・谷秦山（神道）などが講演しています。これらの人物は著述した書物を豊受大神宮（外宮）に奉納して豊受大御神に奉告する為に参拝。その後、豊宮崎文庫の文庫で蔵書を閲覧。講堂では著述を基に最新の学説を披露しました。



豊宮崎文庫講堂扁額裏面の墨書

以正殿御座板之舊材造焉

元禄三年庚午十一月十八日

と書かれています。

扁額は寛文九年正遷宮（第四十五回）に建てられた外宮御正殿内の「御座板」が使われています。

御用材は大杉山（三重県多気郡大台町）より切り出された檜で、「御座板」は大宮司河辺精長より豊宮崎文庫に頒賜されたものと思われます。



『伊勢参宮名所図会』 六冊

神宮徴古館

薮関月著

(一七九七)

寛政九年(一七九七)板行

縦二六・四cm×横一八・四cm

『伊勢参宮名所図会』は京都の三条橋から伊勢街道を経て皇大神宮・豊受大神宮に至るまで、二見浦・伊雑宮・鳥羽を含めて名所・旧跡を絵入りで紹介した参宮案内記。

(一七九七)

寛政九年に神宮祭主藤波季忠が序文を寄せて上梓し、画・文ともに大坂

の画家薮関月が著しました。出口延佳が創建した「豊宮崎文庫」について、次のように紹介されています。

宮崎文庫 慶安元年に宮建あり、是ハ外宮祠官等の学校にして

講習討論の寮也、古今奉納の書籍目録 悉く檐下ニ掲ぐ、凡四

千部に及べり、又他国素性の人といへども其器をえらひ、講師

を立、文庫人数に非ざれ共、厚志ある人ハ講師とも聴衆とも成

れり

文庫の図に描かれている「やねざくら」は出口延佳が文庫創設にあたって邸宅屋根に生えた苗を移し植えたものです。

## 展示資料一覧

### 資料名

### 製作年代

### 所蔵

#### 一、出口延佳の生涯

靈元天皇口宣案	出口延佳宛	延宝九年五月十一日付	神宮徴古館
靈元天皇口宣案	出口延佳宛	貞享四年正月十一日付	神宮徴古館
靈元天皇口宣案	出口延佳宛	貞享四年四月二十八日付	神宮徴古館

#### 二、出口延佳の説く神道

『陽復記』	出口延佳著	慶安三年著	神宮文庫
『神道秘伝問答』	出口延佳著	万治三年著	神宮徴古館
『太神宮神道或問』	出口延佳著	寛文六年刊	神宮徴古館

#### 三、『鼈頭古事記』の刊行

『鼈頭古事記』	出口延佳校訂	貞享四年刊	神宮文庫
---------	--------	-------	------

#### 四、豊宮崎文庫の創建

『伊勢太神宮神異記』	出口延佳著	寛文六年刊	神宮徴古館
『伊勢参宮名所図会』	蔀関月著	寛政九年刊	神宮徴古館
豊宮崎文庫講堂扁額	林信篤筆		神宮文庫

## 主要参考文献

- 平出鏗二郎「度会延佳及び其神学」『史学雑誌』第十二編第五号・第六号・第七号・第八号・第九号、明治三十四年  
講古会編『出口延佳神主伝』講古会会報第三号 昭和十四年二月
- 青木紀元「度会延佳の古事記研究」『福井大学文学部紀要』第一部人文科学、第八号、昭和三十三年十二月
- 青木紀元「度会延佳古事記研究の過程」『古事記年報七』昭和三十五年六月、古事記学会
- 平重道・阿部秋生校注、日本思想大系三十九『近世神道論前期国学』昭和四十七年、岩波書店
- 西宮一民校注、新潮日本古典集成『古事記』昭和五十四年六月、新潮社
- 西川順土校注、神道大系論説編七『伊勢神道（下）』昭和五十七年十一月、神道大系編纂会
- 平重道「度会延佳と山崎垂加」『神道大系月報』二十七、昭和五十七年十一月、神道大系編纂会
- 青木紀元「延佳神主の古事記校正」『神道大系月報』二十七、昭和五十七年十一月、神道大系編纂会
- 佐古一冽「度会延佳と豊宮崎文庫―延佳の学問形成の淵源について―」『神道大系月報』二十七
- 小野田光雄「鼈頭古事記解題」神道大系『古典註釈編一古事記』平成二年三月、財団法人神道大系編纂会
- 高橋章則「弘文学院学士号の成立と林鷲峰」『東北大学文学部日本語学科論集』第一号、平成三年九月、東北大学文学部日本語学科
- 樋口浩造「度会延佳と近世神道の成立」『江戸の思想』第一号、平成七年六月、ぺりかん社
- 千賀万左江「鼈頭古事記における伊勢系諸本の影響」『古事記年報三十八』平成八年一月、古事記学会
- 特別陳列『古事記の歩んできた道―古事記撰録一三〇〇年―』平成二十四年六月、奈良国立博物館
- 齋藤英喜『古事記はいかによまれてきたか』平成二十四年十一月、吉川弘文館
- 大島信生「国語学からみる『古事記』」『芸林』第六十二卷第一号、平成二十五年四月、芸林会

平成二十五年度企画展示

出口延佳―神道は日本の道なり―

編集・発行 式年遷記念せんぐう館

〒五一六―〇〇四二

三重県伊勢市豊川町前野一二六一―

☎〇五九六―二二―六二六三

無断の複製・転載を禁じます。